

文壇

細江英公記念号

立川と語ろう 立川に生きよう

Écoutez Bien Extra Issue No.3





細江英公 (ほそえ えいこう)

Eikoh HOSOE

写真家、清里フォトアートミュージアム館長、東京工芸大学名誉教授、
(社)日本写真家協会会員、(社)日本写真協会会員、日本写真芸術学会会員

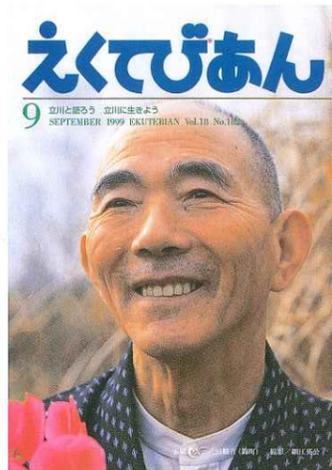
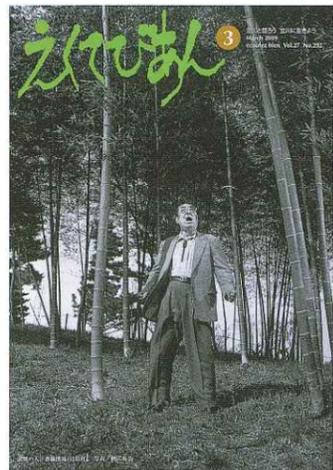
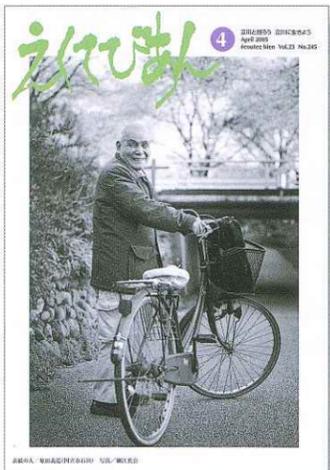
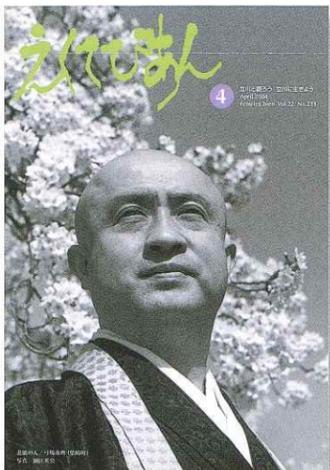
- 1933年 山形県米沢市生まれ。本名・敏廣。18歳のときに「富士フォトコンテスト学生の部」で最高賞を受賞し、写真家を志す。
- 1952年 東京写真短期大学(現東京工芸大学)写真技術科入学。
その年の秋にデモクラート美術家協会の瑛九と出会い強い影響を受ける。1954年卒業。
- 1956年 小西六ギャラリーで『東京のアメリカ娘』にて第一回個展開催。
- 1960年 『おとこと女』、1963年『薔薇刑』で評価を確立し、1969年『鎌鼬』で芸術選奨文部大臣賞を受賞。
主な写真集に『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬』『抱擁』『ガウディの宇宙』『ルナ・ロッサ』『おかあさんのばか』『胡蝶の夢 舞踏家・大野一雄』『死の灰』などがある。
また、米児童文学作家B. J.リフトン女史との共著(英語版)で『Taka-chan and I』『A Dog's Guide to Tokyo』『Return to Hiroshima』『A Place Called Hiroshima』などがある。
- 1998年 一連の作品により紫綬褒章を受章。
- 2003年 世界を代表する写真家7人のひとりとして英王立写真協会創立150周年特別記念メダル受章。
- 2006年 写真界の世界的業績を顕彰するルーシー賞(米)の「先見的業績部門」を日本人として初受賞。
- 2007年 旭日小授章を受章。
- 2008年 毎日芸術賞受賞。内外での展覧会多数。
- 2009年 『鎌鼬 新装普及版』を出版。同年、ルッカ・デジタル・フォトフェスティバル(イタリア)の2009年度マスター・フォトグラファーに選ばれ、代表作を写真絵巻・屏風・掛け軸で展示。
- 2010年5月
ニューヨークにてナショナル・アーツクラブより
日本人として初めて第18回写真部門生涯業績金賞を受賞。

細江先生と —— 撮影の合間に

聞き手：えてびあん編集スタッフ

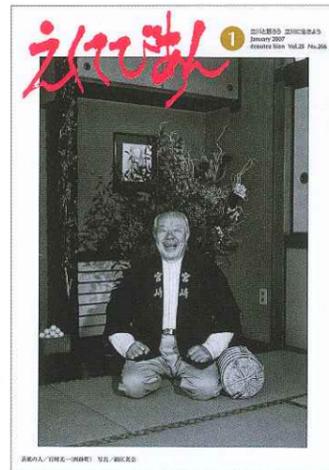
(細江英公先生と、息子さんと写真家の細江賢治さんがお応え下さっています)

11年間、季節ごと表紙の撮影のため立川を訪れて下さった細江先生。撮影した表紙の人は127人になりました。〈世界の細江英公〉!なのに、いつもフレンドリー。気さくにお話をしながらの撮影は、毎回とても楽しい時間でした。平成22年4月3日。この日は最後の撮影。モデルは細江英公先生ご本人。普濟寺の弓場さんとお話し、古民家園で撮影。いつものように甚五郎でお昼を食べて、ゼルコバでお茶をして……。軽妙で、ユーモアがあって、でもとっても深いお話をしてくださる細江先生。長い間、本当にありがとうございました。

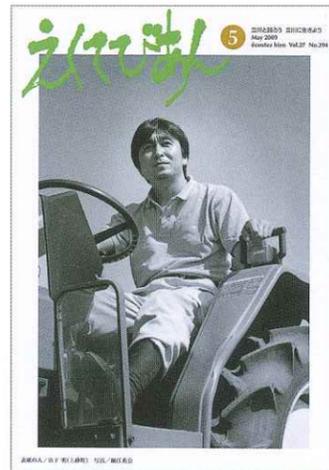


〈普濟寺から古民家園へ赴く車中〉

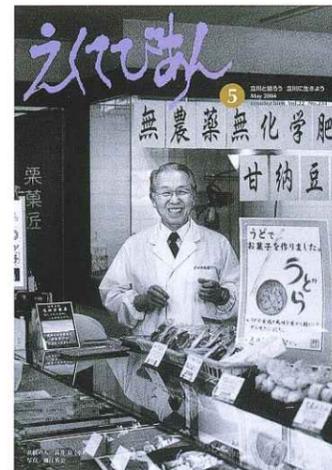
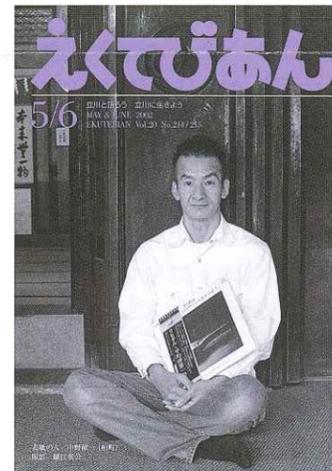
英公 桜がちょうど満開ですね。
——そうですね、明日が一番きれいだという話ですよ。
英公 桜には青空ですね。普濟寺さんの撮影もしましたね。桜が立派でしたね。
——原田さんの撮影も根川の桜でしたね。撮影の時に時間がかかることってあるのですか？
賢治 齋藤溪城さんの時がそうでしたね。
英公 吟じてもらうのに時間がかかりました。
——本当に吟じてもらったのですか？
英公 そうですよ。吟じていただく口の形が一番いいものを選ぶんですよ。
——いいものを選ぶまでに時間がかかるわけですね。
英公 そうです。だから一曲全部やってもらうわけです。ああ、この道も通ったことがあるね。
——それぞれに思い出がおありだとは思いますが、どんな方を今思い出されますか？
英公 豊泉さんとか三田さんとか。宮崎光一さんとか。
賢治 この辺のお宅でも撮りましたよね。うどの……。
——山下さん。
英公 うどと言えはさ、うどまんじゅうじゃなくて……。
——うどらの長井さん。
英公 そうそう。この辺は蔵があるんだね。蔵といえば蔵の中でも撮ったね。

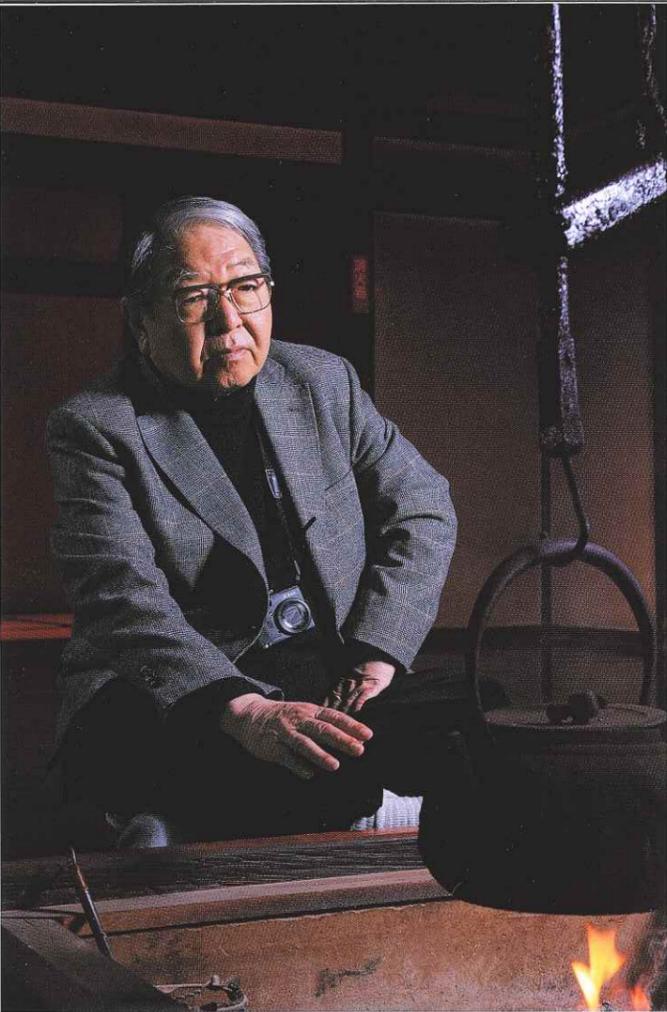


——蔵館ですね。
賢治 古い蔵を持っている人で、フランスに留学していた方。段ボールでアートを創る。
——中野猷一さん。よく覚えてますね。
英公 賢治はよく覚えているんだよな。そう、一人一人、思い出がありますよ。
〈古民家園 奥座敷で(細江先生が首に小型カメラを提げて座っている)〉
——世界の細江が小型カメラを首に提げる、の図ですね(笑)。
英公 いや、これで撮れなきゃ意味がない、まさに。こうやってるか(ポーズをとる)。大久保さん(いつもレフ版を担当しているえてびあんスタッフ)、今日は手持ち無沙汰だね。大久保さんはライトを持つ。ライトを持って10年間だね。もうすっかりライトのことはよくわかっている。これを反射するとこの光がどこへ行くとかね。この辺どうでしょう？なんてね。この辺？「お！いいじゃないか」って。こういう風になってきたんですよ。——それは素晴らしい！細江先生直伝のライティング。
英公 そう直伝の。「ライティングのことは俺に任せろ」だ。
——大久保は先生の何番目の弟子ですか？
英公 13番目。13じゃ、まずいか(笑)。
——先生。カメラマンが先生の視線、ここに欲しいそうです。
英公 あ〜、目があっちに行きたくなくなっちゃう(笑)。



——いつも、この辺りに芳賀(えてびあんスタッフ)を立たせて踊らせていたんじゃないですか？モデルの視線をそちらに引きつけるために。
英公 そうですね。ほんと、ほんと。でもね、撮るより撮られる方が楽。これからはこういう風に生き方を変えたいですね。(一同爆笑)
——先生は2039年まで生きるって決めたとか。
英公 そう。世界中どこへ行っても言ってる。この5月6日にね、ザ・ナショナル・アーツ・クラブの金賞をいただいた授与式のあったニューヨークでもちゃんと言いました。私は皆さんから多くの友情をいただきましたから、お返しをしなければならない。その為には時間がかかる。少なくとも2039年までは生きたい。いくつになるかという106歳。





〈古民家園 囲炉裏端で〉

英公 豊泉さんを撮ったのは、何年くらいだったかね？

賢治 10年くらい前ですね。

英公 ということは豊泉さんは今いくつくらいだ？

——79歳くらいでしょうか。

英公 じゃあ、70くらいの時に撮ってるんだ。米沢の家にはこういう大きな囲炉裏があったね。

——先生はもともと米沢のご出身なんですか？

英公 米沢生まれ。僕の母親の里。生まれて3ヶ月で東京ですから。昔はね、赤ちゃんを産むのに里に帰って産んで、産後の世話をしてもらって赤ちゃんの首が座ってから

東京へ戻って来たわけですね。疎開もしているんですよ。中学1年の時、米沢で終戦を迎えている。

——先生、いつも撮影するときはそうしてお話なさるんですか？

英公 シャベりますよ。山形行ったら山形弁シャベりますよ。「山形弁さべってます」(笑)。やっぱりさ、シャベりながら撮るっていうのはとってもいいんですよ。和むでしょ？それから心が通じるじゃないですか。シャべらない場合もある。シャベる場合もある。臨機応変ですよ。

——なるほど。えくてびあんの表紙の人はプロのモデルではないので、緊張しちゃうんじゃないかなと思って。

英公 そこはもう大久保さんがよくわかってる。僕の耳がピクピクした時、大久保さんが見てるわけね。そうすると編集長の芳賀さんと大久保さんが緊張を和らげてくれる。撮影の時はね、是非大久保さんを。なにしろライト10年ですから(笑)。

——13番目ですか？表紙の人の撮影には最初からいたんですよね。

英公 10人目でライト10年といきましょう。(一同爆笑)

〈古民家園 縁側で〉

——石塚孝江さんはここで撮影したんですね？

賢治 そうですね。踏み台のあるのはここだけです。

——先生は世界中いろいろなところへ行かれますよね。いろいろなところを知っていて、いろいろな方をご存知で、それで立川で撮影するってどんな感じなんですか？

英公 いや、同じですよ。全く同じです。人は世界中どこも同じで、場所が違うだけだから。(カメラマンを指差しながら)なんだ、なんだ？カメラマン、一生懸命撮ってるな(笑)。

——あ、雲間から光が来た、来た。先生、もう一回こっち向いてシャベってください。ああ、隠れちゃった……。先生はよく念力を使われますよね。心眼で撮ったり(笑)。

英公 そうそう。使い過ぎて脳みそおかしくなってきた(笑)。

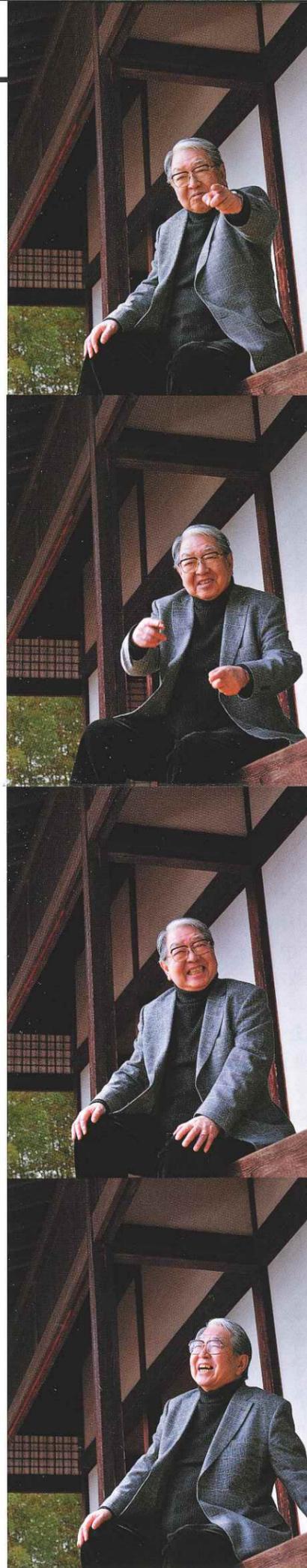
——脳みそ使うんですか？

英公 だって念力は脳力だから。修行が必要だ！

——(カメラマンが先生に)はい。先生OKです。ありがとうございました。

英公 (カメラマンに)先生、念写じゃないよね？

(一同爆笑)



「先生、念写じゃないよね？」

〈利静庵 甚五郎で〉

——先生はおそばがお好きなのですか？うどんですか？

英公 僕は両方好きです。

賢治 僕は甚五郎ではそばは食べたことがないです。うどんは絶品だと思います。

英公 そば、おいしいよ。

——座敷で大丈夫ですか？

賢治 いつも必ず座敷でした。

——じゃあ、座敷にしましょう。

〈甚五郎 座敷で〉

英公 そばにお酒を、ツーっとかけてね。おつなそば。

——おつなそばって、おいしいってこと？

英公 おつは、江戸のね……。

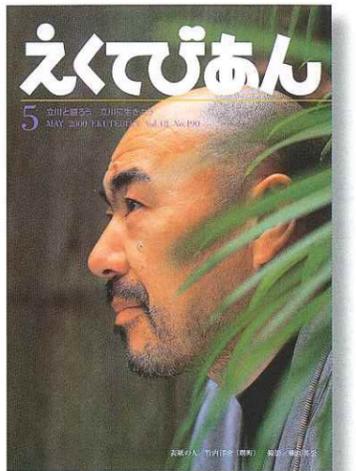
——粋ですかね。

英公 うどんじゃだめ。そば。上野は広小路辺りで。そういうことだね。立川ではやらない。あれはね広小路でやるの。広小路の蕎そばで、タンタンと2階へ上がってね。そば屋は2階に限るなんてね。いろいろ密談を。昔もね、討ち入りにも2階を使うでしょ？

——先生、お酒は召し上がるんですか？

英公 ええ。好きですね。たくさんは飲みませんがね。おそばとね。うどんじゃだめなんだ、おそばじゃないと。うどんにお酒かけたって……。そばにかける。

——立川では最初から甚五郎でしたか？



英公 最初は拵梗でした。

——拵梗さんは都内に移られました。

英公 それからジャズを聴きながらそばを食べた。

——ああ、無庵さんですね。

英公 あと砂川の甚五郎。やっぱりおそばが多いですよ。

——注文するものは決まっているのですか？

英公 私は鴨汁せいろそば。

——賢治さんは地獄でしたか(笑)。

賢治 昔は地獄と極楽が交互だったんですけど、最近はずっと地獄地獄地獄地獄地獄だけを選ぶようになりました。

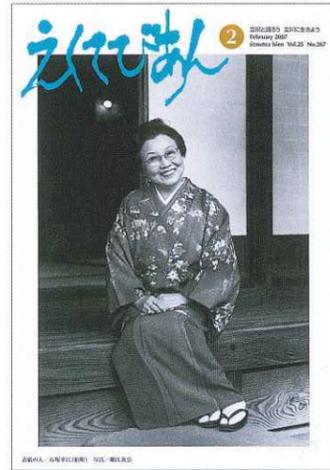
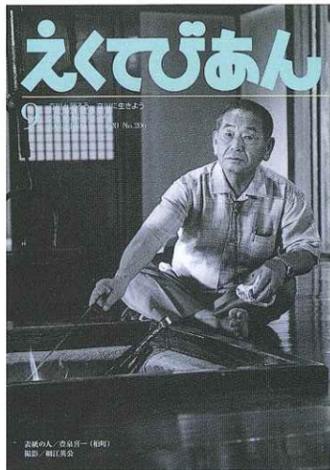
英公 地獄と極楽の違いはなんだっけな？

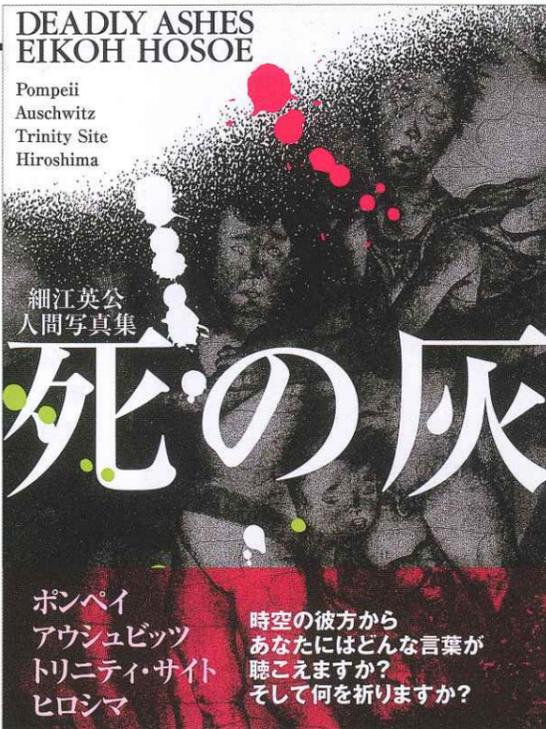
賢治 全然違う。種類が違う。うどんってことだけしか共通点はない。味が違う。

——地獄は辛いでしたっけ？

賢治 はい。辛いです。

英公 そうだね。地獄が甘かったらさ、それこそ地獄だよ。(一同爆笑)





〈ゼルコバのオープンカフェで〉

英公 106歳になってね。106歳は僕にとって可能な歳だと思う。生きていられると思う。なぜならば、僕の尊敬する〈Kazuo Ohno〉がね、今102歳ですね。ただし今病院にいると（この取材後、大野一雄氏は2010年6月1日に逝去。享年103歳）。だからね、私は106歳なんてなんでもないと。ここに人たちがみんなとね、29年後にね、写真発明200年のお祝いの時に集まろうじゃないか！ ありがとう！ それで終わり（笑）。
——先生、実相寺で展覧会なさっていますよね。

英公 今度やる展覧会はね、ほんと4日間だけお寺の百畳敷きの大広間で、僕の「死の灰」という本がありますが、それを絵巻にしてあるんです。

賢治 絵巻5本、約38mです。

英公 ポンペイから始まって、アウシュビッツ、広島、長崎と、要するにポンペイというのは2000年前、あそこで亡くなった人たちの姿がそのまま石膏像になってポンペイの博物館においてあります。それを見た時に僕はあるショックを受けてね。これはまるで

広島、長崎で原爆にやられた人達の亡くなった姿そのままではないかと。そう直感として感じたわけ。

だから僕の話の中では、その人達が現代人に対して警告を発している。その警告のために、亡くなった時の姿をそのまま残しているのではないかと。

——どういう警告ですか？

英公 それはね、自分達の死は、火山の死の灰で死んだのだけれど、それは天災である。天災を防ぐことはできない。しかし、今日の死の灰は原爆の死の灰で、それは人間が作ったものだから、人災。なくそうと思えばできるのではないかと。もしそれができなければ、人類すべて破壊し、死んでしまうであろうと。なぜならば、現在地球上にある核兵器、核爆弾の数は地球上の全生命を22回殺すだけの量を持っている。死者の言葉として、そういうメッセージを話している。

——先生ご自身の戦争体験は？

英公 僕なんかの世代は間接的な原爆体

験を持っているんですよ。終戦の年が僕は中学1年。新型爆弾が落とされたって。広島で何十万人が一瞬にして命を絶ったという記事を見ましたね。新型爆弾っていうのはなんだかわからない。まだ原子爆弾と報道される前だから。子どもながらに1発でそれだけ死んだら、百発だったらどうするの？って考えるじゃないですか。僕は疎開しててね、東京から一緒に疎開していた同級生が3人いて、昭和20年の3月にその3人が中学は東京じゃなきゃだめだって親に言われたから東京へ帰るって。で、帰ったんですよ。その日が3月10日だよ。上野だよ。全滅ですよ。

——……………

英公 3日くらい経ってからだったかなあ。先生が教室でさ、誰々君がこういうわけで死んだって。泣いたですよ。わーってさ。田舎の学校でいいって思いましたね。東京の親父から送って来る手紙には空襲がひどい、橋はやられ道路はダメになるなんて書いてあってね。子どもながらにこれからは橋を架けて道路を直す、そういうことをやらなきゃならない。それには土木だ。近くの工業高校の土木科に入ろうって国のことを考えたね。あの時代っていうのは、みんなそうだったから。友達は死ぬし、8月6日には1機のB29が1個落として何十万。百機来たらって、東京なんか百機以上も毎晩のように来てるわけだから思いますよ。戦争に加担した人ではない、普通の家の子どもや年寄りまでも殺してしまう。こうして僕の

トラウマの中に入ってしまったので、ポンペイに行った時にも、そんな風に思ったのよ。

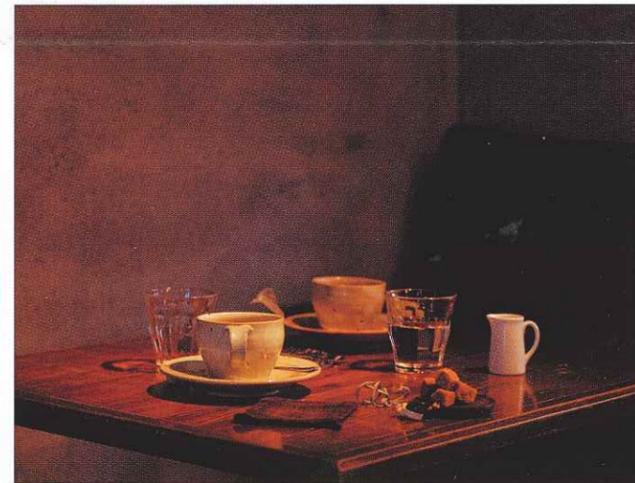
——ポンペイの石膏像はそのままの姿なのですか？

英公 ヴェスヴィオス火山が噴火して逃げ遅れた人が火山灰に埋もれて亡くなったのだけれど、遺体の部分が腐ってなくなって空洞になっていたんだね、そこに後年、石膏を流し込んだところ亡くなった人の姿がものみごとに再現された。耳の形までくっきりと。その中にはお母さんが赤ちゃんを抱いて守っている姿とかあって、人間が作った姿ではないからね、すごいです。原爆で亡くなった人たちは溶けてしまっていて残ってはいないのだけれど、なにが想像としてね、僕はこのポンペイの人たちに語ってもらおうとしてできたのが、この「死の灰」なんですよ。ですから、これは美術館で作品を飾るとかっていうのではなく、一番いいのは公共の場で、写真集ではなく絵巻のような形でね、見られるというのがいいんじゃないかと。だから最初にやったのは杉並区の公会堂なんだ。実相寺でやってもらうのは、毎年そこをお借りしてね、アメリカに「死の灰」を送る前にお寺で死者を供養してもらおうと、その絵巻そのものを供養してもらいましょうと、そういう意味で宗派は関係なく池上本門寺の末寺ですが、すごく芸術にも理解があるので、やってもらったんです。

——先生もいろいろお忙しいですよね。
英公 実相寺のが終わったらまとめてニューヨークに送るんだけど、写真の役割も多様でさ。思想の伝達だからね。いろいろやろうと思ってるの。ケルンの日本文化センターでは「薔薇刑」だとか「鎌鼬」だとか「浮世絵うつし」だとかやりましたね。ずいぶん来てくれましたよ。3月18日たまたま僕の誕生日だったんだけど、ベルリン自由大学でブランデンブルク人文科学アカデ

ミーというのがあって、そこで三島由紀夫国際研究会議っていうのが開かれましてね、僕が呼ばれて行ったわけです。僕の作品集の中に「薔薇刑」ってありますでしょ？ 三島由紀夫が被写体でね。その「薔薇刑」における三島由紀夫像っていう話をしと、学者系の話が多い中で今年は少し広げてね、違う観点から論じてもらうということ……。
——先生が行かれたわけですね？

英公 そうそう。そうそう。ちょうど僕の前にドナルド・キーンさんってご存知かな？ 日本文学の研究者ですね。三島さんとは非常に親しかった。そういう関係で僕もキーンさんをよく知っていて、キーンさんは文学の中の三島由紀夫のお話をされていましたね。三島由紀夫の海外での評価というか評判だな、それはね各国語に訳されている日本の作家でそれが一番多いのは三島由起夫なんですよ。英語、フランス語、ドイツ



語なんて当たり前で、スロベニア語だとかさ、ノルウェー語、デンマーク語だとかね、その数はすごい。ローマの大きい本屋さんなんて、三島由紀夫コーナーがあってさ、三島さんはね、死んでもなお成長している作家だと言われる所以がそういうところにあるんだね。

——いいお話を聞いているうちにずいぶん時間が経っていたんですね。いいお天気でも風もなくすてきな一日でしたね。

英公 穏やかだよ。

——本当にありがとうございました。

リコフォトギャラリー
「RING CUBE」写真展
細江英公・人間ロダン展を開催

この写真展は、写真家 細江英公氏がパリ7区にあるロダン美術館にて、オーギュスト・ロダンの彫刻を中心に撮影した作品を展示するもので、細江英公氏と同シリーズ展示は世界初。プリントには和紙を使用、その特性を生かして蛇腹状の絵巻や掛軸、四曲屏風に仕立てるなど、円形の特殊な展示空間を活かし作家の世界感をよりリアルに伝える試みも行っています。

細江英公氏より一言

私はロダンの「彫刻の写真」ではなくて「人間ロダン」を表現したいという、不遜かつ無謀な心意気から出発しました。これが尊敬するロダンへの敬愛の意思表示ではないか。いま、ロダン作品にカメラを向けることは、そのくらいの心意気が必要にならないとパリ・東京の行き帰りにずっと心していたことです。

〈細江英公・人間ロダン展〉

開催期間
2010年9月22日(水)～
2010年10月17日(日)
休館日を除く

場所
リコフォトギャラリー
RING CUBE ギャラリーゾーン
東京都中央区銀座5-7-2
三愛ドリームセンター8・9階
開館時間
11時～20時(最終日 17時まで)
休館日 火曜日
入場料 無料
URL <http://ringcube.jp>

えくてびあん◎

細江英公記念号
平成22年8月30日発行
発行 有限会社えくてびあん
〒190-0023
東京都立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4F
TEL 042-528-0082
FAX 042-528-0065
URL www.tamatebakonet.jp
発行人 黒須 環
企画・写真・編集 えくてびあん編集スタッフ
デザイン 池田隆男
(WATER DESIGN ASSOCIATES)
印刷 三浦印刷株式会社

無断転載を禁じます。

「えくてびあん」ありがとう!

細江英公

10年前、「えくてびあん」の山田五郎編集長(当時)から「表紙を10年間撮影してもらえないか」という依頼がありました。私はすかさず「お引き受けします」とご返事しました。「えくてびあん」は立川市民のタウン誌として知っておりました。立川は私にとって「心のふるさと」ですから、その心のふるさとのために役に立つことができるとの思いで10年間、途中で芳賀編集長に替わりましたが、誠心誠意、表紙撮影に取り組んで参りました。そして、お約束の10年が過ぎて11年も経ちました。

最初、まず、立川の隅から隅まで知りたいという私のリクエストに、即、応えてくださったのが編集部の大久保さんです。大久保さんは立川生まれの立川育ちで立川のすべての道路を知り尽くしている方で運転の名手です。そこで、撮影の前と後の時間を有効に使って殆どの道路を案内してくれました。およそ大部分の主要な道路を車で走ったことは間違いのないのですが、

そこへ自分で行けと言われても自分で運転して走ったわけではないので無理です。しかし、およその道路は覚えていて、ああ、ここは誰それさん、あ、あそこは誰さんを撮影したというその風景と写真の関係から記憶しているという写真家特有の記憶術が頼りです。でも、最近はメモリーの容量が少なくなりましたから、無理でしょう。

さて、こうしてお約束の10年を過ぎましたが、立川との縁が切れたわけではありません。「えくてびあん」の表紙にご登場いただいた皆様、どうも有難うございました。どうぞ、これからも「えくてびあん」をよろしくお願ひ申し上げます。

平成二十二年 八月吉日

